



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第30回 日本語教育方法研究会
東京国際大学
2008年3月15日(土)

会長 才田いずみ

今回は東京国際大学のご厚意により研究会を開催する運びとなりました。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第30回研究会開催について

日時 :	2008年3月15日(土)
会場 :	東京国際大学 第1キャンパス
開催委員 :	川村よし子(東京国際大学) 名嶋義直(事務局, 東北大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付, 午前の発表者のみポスター貼付	1:50	総会
9:30	一般受付	2:20	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:20	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方の説明	5:00	講評
10:10	口頭発表開始	5:10	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	5:15	閉会の挨拶
12:50	昼食・休憩, 午前の発表者はポスター回収, 午後の発表者はポスター貼付	5:20	参加者全員で後片づけ
		6:00	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場での入会手続きをして参加することができます。お誘い合わせの上、ご参加ください。

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 段階的練習による「話す」能力養成案-中級前半での試み-

清水昭子・村角静華（立命館アジア太平洋大学）

立命館アジア太平洋大学の日本語授業はゼロスタートの学生が2年間の必修コースを経て日本人学生とともに専門に関する授業に参加できる能力養成を目的としている。そのため、現在初級から上級までの四段階のスムーズなつながりを意図した教科書作成を行っている。本発表は、中級前半レベルの「話す」活動について紹介したい。日本語でサバイバルできている学生が、さらにアカデミックな日本語活動のために必要な段落単位の話し方ができるようになるために、①段階的に練習していく②学生自身が初級で学習したことを整理し、タスクに必要なことを学習し、活動後自己評価する、この二つのポイントを中心に構成した。

2. Open Course Ware を用いた聴解指導-講義のききとり練習のための一試案-

深川美帆（富山大学）

講義を理解することは、大学で学ぶ留学生にとって重要なスキルの一つであるが、外国語でのそれは容易ではない。筆者は、講義をききとるための練習に用いる素材として、各大学が授業の一部をインターネット上で公開している Open Course Ware（以下 OCW）の一つである名古屋大学 OCW の授業紹介映像を教材として学部留学生を対象に日本語の聴解練習を行った。この教材について、学習者は概ね満足しているが、学習者のレベルに合わせた手立てが必要であることも明らかになった。

3. 交渉場面における中国人日本語学習者の意見の述べ方-母語場面と接触場面の比較-

李 霽芳（広島大学大学院生）

交渉場面において意見が異なる相手と話し合いを持つ場合、中国人学習者がどのように自分の意見を述べるのかを調査した。その結果、中国語による中国人同士の会話と、日本語による日本人との会話とで、対応が異なる傾向が見られた。一般に中国人学習者は、中国語の「押しが強い」説得方法をそのまま日本語の会話に持ち込みやすいと言われているが、実際には、会話相手の出方に応じてスタイルを調整し、相手への共感や自分に不利な情報の提示などをすることがわかった。中国人の内省から、会話相手に応じて意見の述べ方を調整する必要があると本人が意識していることが分かった。しかし、接触場面でも相手を配慮する意識を持つにもかかわらず、相手の日本人に不安を感じさせたり、違和感を覚えさせたりする場合も見られた。どうすれば相手に失礼にならず、自分が意図した通りの意見を表明できるのかについて、「共感」の概念を段階別に指導する必要がある。

4. 日本での就職を目指す留学生のビジネス日本語教育プログラムの現状と課題-アジア人財資金構想高度実践留学生育成事業の愛媛大学における実践-

向井留実子・高橋志野（愛媛大学）

経済産業省と文部科学省による「アジア人財資金構想」の高度実践留学生育成事業で、四国地区のコンソーシアムの企画が採択され、愛媛大学では、専任教員がビジネス日本語教育のコーディネーションと指導を行っている。本発表では、この事業において専任教員が担当するメリットがどのように生かされ、デメリット緩和のため、どのような工夫が行われているかについて述べる。また、現時点で、1)授業を平日に行うことの不都合、2)留学生の授業への受け身的な取り組み方、3)ビジネス日本語教育と日本ビジネス教育と関連づけの必要性などの問題が挙がってきているが、これらへの対応策についても言及する。

5. 日本語学習者向けケータイメール用教材の開発

笠井淳子（明治大学）・篠崎佳子（学習院女子大学）・二瓶知子（国立国語研究所）

現代の日本において、ケータイメールはコミュニケーションを行う上で重要な役割を果たしている。しかしながら、日本語学習者の中には、日本語のコミュニケーションツールとして、ケータイメールを十分に活用できていない人も少なくない。また、ケータイメール自体には、「書き言葉」でありながら「話し言葉」であるという特徴や、手軽でカジュアルな手段であるため、親しい相手とのやりとりに使われることが多いという特徴がある。これらの特徴は、文字を通して話し言葉を学ぶことを自然にし、また、親しい相手との頻繁なやりとりから、話し言葉特有の特徴や表現を学ぶことを可能とする。以上のような現状と特徴を踏まえ、1)日本語のコミュニケーションツールの一つとしてケータイメールを積極的に使えるようになること、2)ケータイメールを通じて話し言葉の表現を身につけ、使えるようになることを目的として、日本語学習者向けケータイメール用日本語教材を開発した。

●ポスター発表（上記5件を含む15件）

6. Eメールによる作文添削における添削者の工夫とその理由

武田知子（恵泉女学園大学）・鈴木美希（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

本発表は、Eメールで作文を添削する場合、添削者はどのような添削方法をとるのか、個々のフィードバック(FB)方法をどのような理由から使い分けているのかを明らかにするものである。Eメールでの作文添削の経験を持つ5名が実験的に同じ作文を添削した後、添削方法とその理由についてインタビューを行い、KJ法で分析した。その結果、色分けや記号の使用、ワープロソフトのコメント機能の使用、全文をコピーして書き直しという3つの添削パターンと、正解を示す、正解を示さない、あえてFBしないという3つの方法に分類された。FBの決定には、教育効果や書き手を尊重する気持ち、添削のしやすさ、学習者・添削者双方の負担が影響し、それらの背後には「添削者の方針」があること、その方針は、活動の特性や書き手との関係、これまでの経験で築かれた自分の信条に影響を受けていることが分かった。

7. 外国語学習支援プログラムの1方法について

松川良隆（日本大学高等学校・中学校）・松下安智（郁文館高等学校）

外国語学習者（留学生ならびに日本人学校生徒も含む）を対象とした言語学習における記憶定着・興味関心付けをはかる1方法を示す。特に日本語学習者が直面する問題、言語感覚と文化的背景の違いを克服するための学習方法を提案する。具体的には東アジアに古くから伝わる「十二支」を基にオリジナルカードを作成し、小学校や中学校で行った研究授業をふまえた、その結果の応用を試みたい。オリジナルカードは4種類のカードから構成され、文字、音声だけでなく、文化をも学習することができる。研究授業後にテストを行い、その結果得た統計によれば、多くの学習者の理解度の向上がみられた。各国諸言語にも対応しうる「プログラム」も考案・提示する。カードを用いたコミュニケーションの方法も提案したい。

8. 多言語版日本語辞書における用例作成の諸問題

金庭久美子（横浜国立大学）・川村よし子（東京国際大学）

チュウ太のweb辞書(<http://chuta.jp>)には編集者間で個々の辞書情報の記述内容について意見交換が可能なコメント機能がついている。本研究では2005年5月から2007年12月までの全コメント629を分析した。その結果、例文作成には、1)異なった文化圏の学習者への配慮、2)品詞分類の異なる言語への配慮（特にサ変動詞および形容動詞）、3)接尾辞的用法への配慮、4)用法・コロケーション・連語・慣用句等の言及等が必要であることがあきらかになった。これらは今後の日本語学習者のための辞書の作成においても配慮がなされるべき項目である。現在公開中のチュウ太のweb辞書においては、個々のコメントに対しては編集者および編集責任者が個別に対応を行い、すでに改善がなされている。

9. レポートを書くときに学習者はどのように語を選択するのか-副詞を中心として-

前坊香菜子（早稲田大学）

本稿では、レポートや論文で使用される副詞を中心に学習者に実施した質問紙調査とインタビューに関して報告する。日本語学習者にとって文章の文体にあった語の選択をすることが困難な場合が多い。本研究は、学習者がレポートを書く際にどのように語を選択するのか、また、どの程度語の位相に対する知識を持っており、その知識が適切に使用できるのかという点を明らかにすることを目的とした。質問紙調査の結果、レポートを書く経験をしている協力者の正答率は高かった。また、よく使う語のほうに知識を適切に運用できていた。一方、初級で学習した副詞を使用するという傾向も見られた。インタビューからは、漢語のほうに硬い語であるという知識を持っており、語の選択基準としていることがわかった。このほか、自信のない語の使用を避ける傾向があり、まずは意味が通じることを優先させている様子が見られた。

10. 翻訳クラスにおけるピア・ラーニングの試み

田中敦子（早稲田大学）

大学で学ぶ中級学習者は主張の書き方を学んだり、自身について物語ったりするなどして、漢語を多用した形式的な論文調の文章は書けるようになる。だが、口語表現や擬音・擬態語が多く出てくる小説やマンガが理解できず、むしろ平易で読みやすい文章を書くことが困難である学習者は多い。早稲田大学別科文章表現5Aでは、与えられた内容に関して多様な日本語で表現できる文章産出力の向上を目指し、英訳された日本の小説やマンガ、アニメの脚本を日本語に翻訳するという授業を試みた。この授業では辞書を片手に一人で翻訳するのではなく、学習者同士または日本人ボランティアとのインターアクションを経て翻訳するという過程を重視した。その結果、学習者は他者からアイデアを得ながら自分の産出した日本語をモニターし、選択肢の広がった語彙や表現を自分のものにしていく。また、ピア・ラーニングによってさらに難易度の高い課題への学習動機を高め、自信を持つようになることがわかった。

11. 「丁寧な」と「cortés」の概念の比較-アンケート調査をもとに-

里見文（筑波大学大学院生）

「丁寧」という概念は、井出(2006)が指摘するように異なる文化・社会において全く同じであるとは限らない。井出(1992)では「丁寧な」と「polite」の概念を実証的に比較し、その異同を明らかにしている。そこで本発表では、井出の枠組みを参考にして、日本語の「丁寧な」とこれに相当するスペイン語の「cortés」の概念の異同について、日西両母語話者を対象に実施したアンケート結果を基に報告する。

12. 文学教材を用いた読解授業の試み-太宰治の「走れメロス」を読む-

池田庸子（茨城大学）

学部留学生を対象とした日本語読解クラスで、今までに日本語で小説を読んだことがあるかどうか聞いたところ、49名中22名が「ない」と回答した。このことから授業の内外で小説が読まれていないことがうかがえる。学部留学生のための読解授業を、専門教育のための予備教育としてだけでなく、生涯教育、すなわち学習者が卒業後も日本語を読み続けるための予備教育と位置づけ、文学作品を含めたさまざまな文章に接することが重要であると考えた。本稿では、太宰治の「走れメロス」を教材として用いた授業報告を行う。授業では、主に1) 細部と物語全体の構成を把握しながら読み進めること、2) 話者の視点の変化について考えること、3) 他の文章と比較しながら、作品の文体について考えること、4) 自ら解釈すること、を学習者に促した。授業での取り組みやアンケート結果をもとに、文学教材を使用する際の問題点と可能性について検討する。

13. 中上級日本語学習者を対象とした読解型漢字教材

小林由子（北海道大学）

近年、漢字教材のヴァリエーションは広がりつつあるが、上級学習者向けの教材は必ずしも十分とはいえない。そこで、本発表では、「読むための漢字語彙」という視点から、内容を重視し漢字語彙の知識を精緻化する方法として「読解」を主眼においた教材による実践を報告し、「読解型漢字教材」のありかたを考察する。

14. 外国人留学生と日本人学生との交流を目的とした合同授業の試みー「住宅トラブル解決」ロールプレイ活動ー

田中亜子・杉山ますよ（国士舘大学）

多文化社会になりつつある日本で日本人と外国人の交流は必然になってきている。近年、本大学でも留学生が急激に増えつつあるが、大学の授業で日本人学生と留学生の交流はほとんど見られない。そこで留学生と日本人学生との交流を目的として他学部との合同授業を実施した。留学生（複数学部）と日本人学生（法学部）双方の関心に沿って「住宅問題に関するトラブルケース」を課題として提示し、ロールプレイを通して留学生・日本人それぞれの立場に対する理解を深める活動を行った。その結果、留学生・日本人双方にとって、お互いの社会文化の新たな一面や課題に気づき、その後の学習と交流への動機づけとなった。今後、教師が連携し、留学生と日本人学生が共に学ぶことのメリットを活かせるよう実践を積み重ねていくことが望まれる。

15. 日本語初級レベルの理科系留学生を対象とした基礎科学教材の開発

工藤嘉名子・道脇綾子（東京外国語大学）

東京外国語大学留学生日本語教育センターの国費学部留学生予備教育課程では、日本語初級後半レベルの理科系留学生を対象とした基礎科学教育を行っている。しかし、従来使用してきた教科書は、その内容が一部今の時代に合わなくなってきたことや、表現や表記が学生の日本語レベルを反映していないことなどから、現在、改訂版教科書（『留学生のための基礎科学【改訂版】』）の開発を進めている。教材開発にあたっては、(1)旧版の言語調査（語彙調査・漢字語彙調査・使用文型調査）、(2)「基礎科学」の受講生を対象とした授業アンケート・インタビュー調査、(3)授業分析といった基礎調査を行った。改訂版教科書は、日本語初級後半レベルの学生に合わせた語彙・表現を用い、実験の基本操作や基本測定といった科学の基礎知識と、そこで用いられる基本的な科学のことばが共に習得できるような内容・構成になっている。

【午後の部】

●総会

●口頭発表（5件）

16. アニメ・マンガを用いた多様な授業の試み

杉山ますよ・田中敦子（早稲田大学）

日本のサブカルチャーとして注目されるアニメやマンガが日本語学習の強い動機付けとなっている学習者は多い。本大学の夏期プログラムの初中級クラスにおいて、アニメ・マンガに興味を持つ学習者を対象に様々な授業を試みた。目的は学習者の興味を生かし、自分の言いたいことを表現する力を伸ばすことである。活動内容は、日本語母語話者との討論やアニメの内容理解、マンガの翻訳を通して口語表現やオノマトペなど日本語の特徴的な表現を認識した後、好きなアニメやマンガをとりあげ、発表を行った。学習者のアンケートによると様々な試みは好評であった。学習者にとって自分の興味のあるものを教材とした日本語学習は学習動機が強くなり、それにより高い学習効果も得られるのではないかと期待できる。

17. 上級における映像を活用した語彙運用の授業の実践

黒崎亜美・井上洋輔・中山康昭（ラボ日本語教育研修所）

日本語能力試験 1 級に合格し、1 級レベルの語句の意味が理解できている上級学習者でも、会話や作文の中に

その語句が現れることは稀である。これは、ただ語句の意味を理解するだけでは受容語彙から産出語彙にならないことを意味している。そこで、産出語彙への移行を促すために、学習者が心的辞書の中からの検索を有用に行う活動を試みた。映像（今回はドラマを取り上げた）を見たのち、その中のワンシーンを取り上げ、その状況や登場人物の心情を描写する活動である。このように意図的に語彙産出の機会を作ることで、受容語彙から産出語彙への移行の練習となることを示す。

18. 共同編集用の電子掲示板を使った翻訳演習の試み

クリスティーナ・フメリヤク寒川（リュブリャーナ大学）

リュブリャーナ大学では日本研究専攻の4年生を対象に、母語のスロヴェニア語から日本語への翻訳の練習を行っている。教師の訳例に依存しがちな学生を自律させ、訳出の過程を意識化させるために、学生が個別に選んで日本語へ訳した文章を電子掲示板に載せ、互いの訳文にコメントを付け、訂正する活動を取り入れた。ここではこの授業の目標、形態、内容を紹介し、ピアレスポンスとe-ラーリングを取り入れた授業の効果について報告する。

19. 日本語学習者の不安の軽減-母語話者との会話頻度・会話場面との関係-

渡邊英裕美・洪在賢・入山美保・吉田睦（筑波大学大学院生）

日本語学習者は、日本語授業や日常場面で、日本語で話す時に不安を感じることもある。このような不安を取り除くには、母語話者との交流が有効であると言われていたが、本当にそうだろうか。また、そのような効果を得るにはどの程度母語話者と交流する必要があるのだろうか。本研究では、この点を明らかにするために質問紙調査を行った。調査の目的は①学習者は教室外でどの程度母語話者との会話機会を持っているか、②母語話者との会話の頻度と会話場面の数は日本語不安に影響を与えるかの2つであった。その結果、学習者の母語話者との平均会話頻度は週4.5回であったが、その場面はアルバイト先や授業の休み時間などに限られていることがわかった。また、会話頻度と不安の関係については、母語話者との会話頻度が高くなると、教室内での不安と教室外での不安ともに軽減されることが明らかになった。一方、母語話者との会話場面数は日本語不安に影響しなかった。

20. 論理的思考能力育成のためのディベート授業-議論の分析から明らかになったこと-

田代ひとみ（東京外国語大学）

アカデミックジャパニーズで要求されることの1つに、論理的思考能力の養成があり、ディベートはその有効な方法と考えられる。しかし、言語能力と高度な思考能力が要求されるため、ディベートの実施は学習者にとって容易なことではない。本報告では、大学学部留学生のディベートの会話にあらわれた問題を分析し、どのようにすればよりよく授業に活用できるかを探った。問題点として、かみ合わない議論、一貫性のゆらぎ、一般知識の不足による認識、資料の読み上げ等があがった。ディベートでは、話すことに注意が向かいがちであるが、相手の主張を的確に理解し、そこにあらわれた問題点について質問を考えたり、反駁したりすることによってこそ、論理的思考能力が向上すると考えられる。これらを伸ばすための手助けを事前に行う必要があると思われる。

●ポスター発表（上記5件を含む14件）

21. 日本語学習者の母語使用時と日本語使用時における初対面場面での会話管理-中国人日本語学習者を例に-

仁科浩美（山形大学）

日本語学習者の初対面における母語（中国語）による会話と、非母語（日本語）による会話管理の違いを明らかにすることを目的とする。会話は質問・応答・自発的情報提供等の面から比較した。その結果、非母語の場合は、自ら相手に質問することが少なく、聞かれた以上の情報を提供することが母語で話す場合より少ない傾向がみられた。

22. 日本語教師のティーチャースニング-母語話者との比較-

日野純子（立教大学）・松田真希子（長岡技術科学大学）

本研究は日本語教師が学習者（上級話者）と会話する際、母語話者との会話に比べ相槌行動をどのように調整するのかを分析したものである。分析の結果、相槌の頻度には対母語話者と非母語話者では特に差異が見られなかったが、対学習者への特有な聞き方の調整（ティーチャースニング）が観察された。これにより教師は無意識に学習者に対する自然な談話モデルの提示を妨げていることを示唆した。

23. 中国人日本語学習者の自己紹介時における呼捨ての要因

田鴻儒（大阪大学大学院生）

中国人の上級日本語学習者と日本語母語話者間での日本語の自己紹介において、学習者がしばしば相手の名前を呼捨てにする場面が観察された。本発表は実際の会話データの分析からその要因を明らかにし、日本語の会話教育に寄与することを目的とする。会話の分析より、学習者の呼捨ては、1) 受信応答、2) 名前にあたる漢字の思案、3) 名前の読み方を問うという3種類の場面で観察されたことが分かった。また、呼捨ての一因には、日本語に比べ呼捨てが多用される中国語に影響されたことも考えられる。以上より、呼捨ての要因として、1) 名前の聞き取りと理解に気を取られ、丁寧さに気を配ることができなかつたため、および2) 母語の干渉、の2つがあることが分かった。会話教育の現場では、中国語と日本語の呼捨ての相違を教授すると同時に、名前の読み方や文字を確認する時の日本語表現を提示することが重要であると考えられる。

24. 理系学部の日本語コース設計と評価に影響する要因

鎌田倫子・渡部学・中河和子・岩本阿由美・高島智美・深川美帆（富山大学）

理科系キャンパスの日本語コースでは、1) 日本語に晒されていないこと、2) 学習項目を絞って学習させる必要性、3) 専門教員の日本語学習への無理解、4) 理屈で覚えようとする学習態度などの問題が見られる。すぐにできる実際的なプログラム評価を通常書類や授業記録から行いプログラムの有効性についての定性的評価を試みた。評価に影響する要因として外部要因と内部要因が区別され、内部要因の中に、コースデザイン（特にクラスの頻度）、コース教科書、学習者の主体的な参加態度などがコースの質に影響を与えている。

25. 日本語テキスト読解中の視線データの分析-日本人と外国人の読解過程の特徴-

寺朱美（北陸先端科学技術大学院大学大学院生）・杉山公造（北陸先端科学技術大学院大学）

第2言語習得で母語の影響は避けられないことから、本研究では、母語の影響の観点から日本語テキスト読解中の学習者の眼球運動を観察し分析した。1世紀以上に渡る眼球運動の研究から、テキスト読解時の視線は停留と移動を交互に繰り返すことが明らかにされている。読解中の視線停留と視線移動データがテキストの難易と関係なく母語地域別グループの特徴が出現するかどうか実験で調べた。その結果、テキストの難易に関わらず停留と移動でグループ差が認められた。視線停留が情報を読み取るためと考え、日本人以外が長い時間停留したのはなじみの薄い単語情報の収集時間が長い可能性が考えられる。また、視線移動が情報を探すためと考え、日本人と中間圏グループが長い時間移動したのは構文構造に関連している可能性が考えられないだろうか。

26. 「ポスター発表活動」評価の一視点-質疑応答に基づく発表内容の評価-

菅原和夫・高橋澄子（東北大学）

スピーチ、口頭、ポスター等の発表活動が実施されているが、これまでの評価は発音の明瞭さ、話のスピード等が中心で、内容は余り検討されてこなかった。しかし発表活動にとって発表内容が肝心である。発表内容の評価をすることで、学習者の意欲を高める共に、発表活動の改善に資する。そこで評価項目として発表内容を改めて取り上げ、その評価を発表後の質疑応答を基に行う方法を提案する。

27. 初級学習者のインタビュープロジェクト-インタビュー準備における協働的学習を中心に-

江原美恵子（早稲田大学）

プロジェクトワークは、コミュニケーション能力育成に適し、またグループ学習をしながら、かつ、主体的・自律的学習が行われる、というように多くの学習メリットが挙げられているが、インタビューのように母語話者との接触が多い活動は、中級以上で行われるのが現状である。しかし、実社会でのコミュニケーションは、学習者のレベルを勘案することなくなされることを考えると、初級段階から実際のコミュニケーション場面に身を置くことは、その能力育成にとって重要であろう。本稿では、インタビューを滞りなく行うため、ある学習者が作成した質問表の完成までに焦点を当て、クラスにおける協働がその際どのようになされたのか、その重要性を論じる。学習者は、このインターアクションで、日本語でのコミュニケーションを仲間と構築していくが、それは、インタビュー調査での社会人との実際のコミュニケーション場面に応用され学習者の能力を引き出すことにも貢献した。

28. 作文クラスにおける模擬評価活動-作文の内容への意識を高めるために-

俵山雄司（群馬大学）

大学の授業で課されるレポートでは、文法の正確さや表現選択の巧みさだけでなく、興味深さなどの内容面も当然評価の対象になってくる。しかし、作文のクラスで作文を執筆させると、その内容の陳腐さに教師が戸惑ってしまうことがある。ただ、専門科目や教養科目のレポートで、内容の興味深さなどが評価の対象となるとすれば、作文のクラスでその面の指導を無視することはできない。そこで、学習者の作文の内容面への意識を高めるために、学習者がレポート採点者の立場で、同テーマで書かれた複数の文章を評価するという模擬評価活動を行った。その結果、一部の学習者は、内容の興味深さが、文章の評価に強く影響する可能性を意識することができた。また一方で、興味深さへは意識が向きにくい学習者も存在することがわかった。

29. 評価法としてのシャドーイングの可能性

松井晴子（筑波大学大学院生）・小野正樹（筑波大学）

多くの学習者を対象とした場合に、日本語学習者のレベル分けは文法能力を基準とすることが多く、会話能力の評価は課題となっている。本研究ではシャドーイングに注目し、会話能力評価法としての可能性を探る。その第一歩として、本発表ではシャドーイングに文法能力が影響するか、また、誤答に傾向が見られるかを調査し、その結果に基づき、シャドーイングでは一定以上の文法能力を区別できる可能性があること、また、使用可能表現の多様性を測れる可能性があることを示す。

【昼食について】

当日は大学の食堂は開いていませんので、各自で御用意くださるか、近隣の店を御利用ください。
会場にランチマップを用意しておきます。

【懇親会】

後片付け終了後、大学の2号館2階ラウンジにて懇親会を行います。ぜひご参加ください。
会費は2,500円です。

【会場案内】

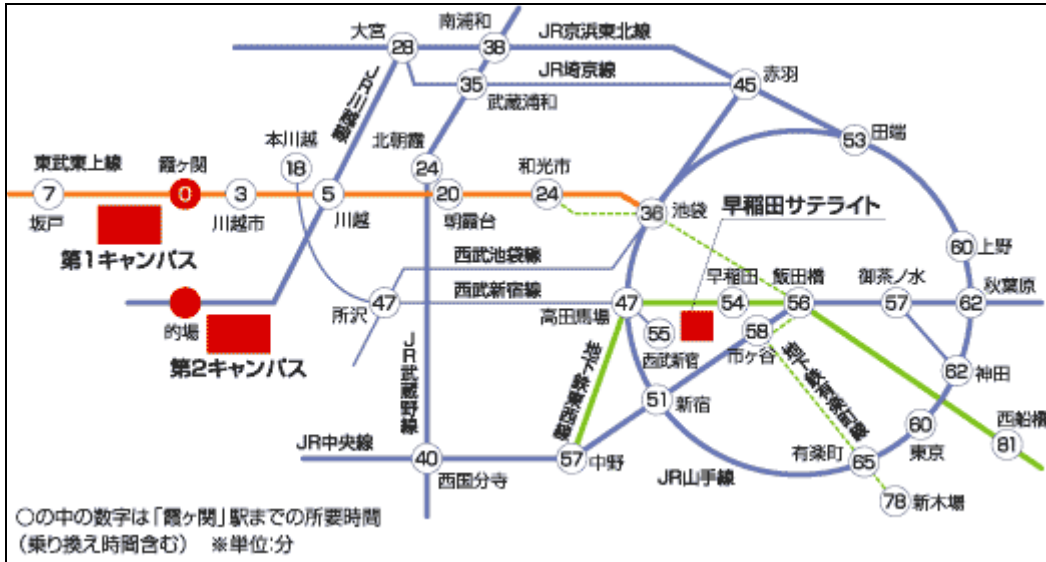
東京国際大学 第1キャンパス
〒350-1197 埼玉県川越市的場北 1-13-1

【会場までの交通】

最寄り駅：東武東上線「霞ヶ関」駅

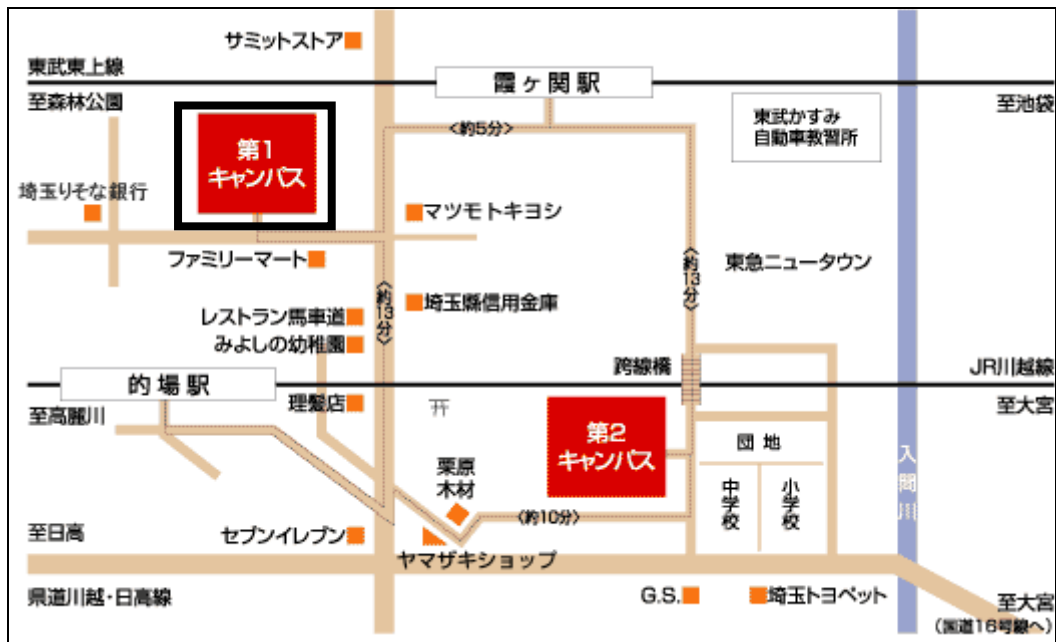
- ・「池袋」駅～「霞ヶ関」駅（池袋から東武東上線の急行で36分）
- ・地下鉄有楽町駅利用の場合：「和光市」駅で東武東上線に接続

【会場の地図】

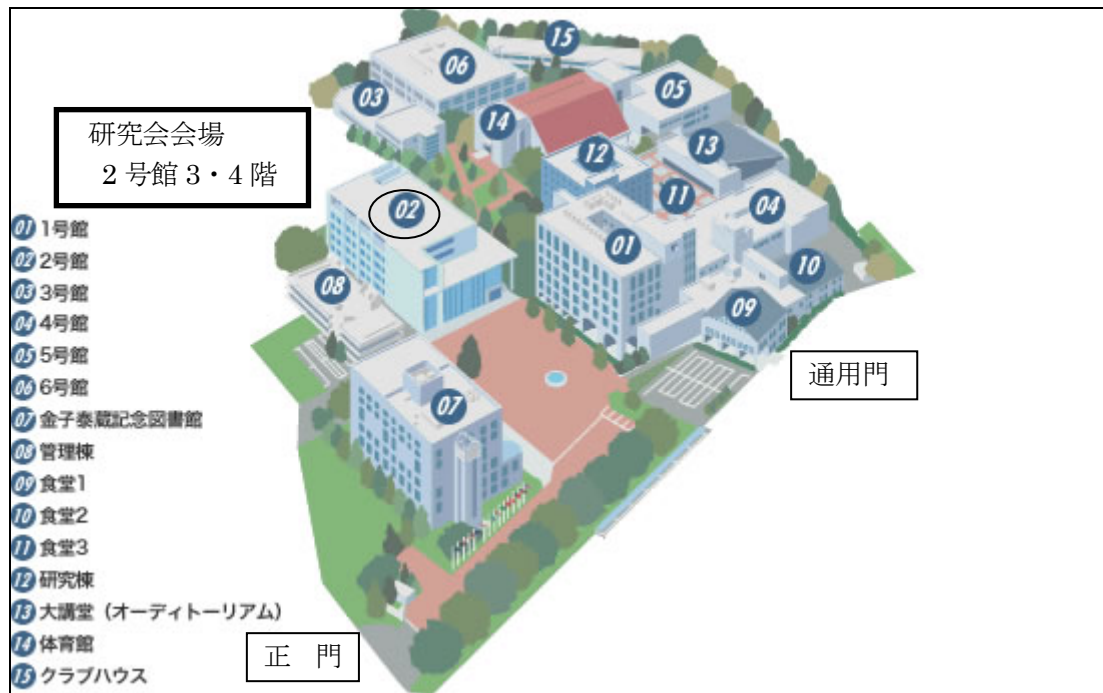


【会場の地図】

会場は東京国際大学の第1キャンパスです。（「霞ヶ関」駅から徒歩で5分）



研究会の会場は2号館の3階および4階です。



【会費納入のお願い】

JLEMでは1月から12月までを会計年度としております。2008年度会費(3,000円)未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくことになりますのでご注意ください。会費は、研究会会場受付にてお支払いいただくか、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。ご不明な点がありましたら、jlem#sal.tohoku.ac.jp(＃は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会